話題３７　永井　隆博士の語る「鳩と狼」

～「抑止力」の意味について考える～

永井　隆博士。１９４５年８月９日、当時の勤務先の長崎医科大学で被曝し、慢性骨髄性白血病でもって１９５１年、４３歳でその生涯を閉じた。闘病の間に、多くの著作を残した。片山はるひ著、永井隆～原爆の荒野から世界に「平和を」～にその人物像が描かれている。一読をすすめたい。

博士には、自らの死後に孤児になるであろう子供たちへの遺言ともいえる「鳩と狼」と題した文章がある。内容が、現代社会をあたかも予言したかのような思いが綴られており、紹介したい。

博士は、１９３３年に満州事変に、１９３７年には中国に従軍し九死に一生を得た。復員後に、残虐な原爆投下の結末を目の当たりにした。「人々はむごたらしい戦場の跡を眺め、口をそろえて、戦争はもうこりごりだ。これっきり戦争を永久にやめることにしよう」と叫ぶ。そう叫んでおきながら、「何年かたつうちに、いつしか心が変わり、なんとなくもやもやと戦争がしたくなってくるのである」と嘆く。

戦後７０年。戦争を知らない世代が大半を占める。博士は語る。「理屈はなんとでもつき、世論はどちらえでもなびくものである。日本をめぐる国際情勢次第では、日本人の中から憲法を改めて、戦争放棄の条項を削れと叫ぶ声が出ないとも限らない。そしてその叫びがいかにも、もっともらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかもしれない」と。

最近の国会の論戦のようにも思える文章である。強力な抑止力の信奉者は、「敵が攻め寄せたとき、武器がなかったら、みすみす皆殺しにされてしまうではないか？」と主張する。博士も問いかける。「武器を持っている方が果たして生き残るであろうか？、武器を持たぬ無抵抗の方が生き残るであろうか？」と。

かつて、無抵抗の住民は、生き延びる権利を有していたが、自決を強いたのは敵国ではなく、自国の軍隊であった悲惨な歴史もあった。

博士は語る。「狼は鋭い牙を持っている。それだから人間に滅ぼされ

てしまった。ところがハトは、何一つ武器を持っていない。そして今に至るまで人間に愛されて、たくさん残って空を飛んでいる」と。いにしえの琉球の歴史もそのことを物語っている。「敵がなければ戦争は起こらない」。

投下された原爆の意味を、今一度考えてみたい。抑止力とは？。「牙」は、果たして県民のために、国民のために、人類のために存在するのであろうか。

永井博士の「鳩と狼」は、現代社会を予言している。

2016年8月10日

永井隆博士。1945年8月9日、当時の勤務先の長崎医科大学で被爆し、慢性骨髄性白血病のため51年、43歳でその生涯を閉じた。闘病の間に、多くの著作を残した。片山はるひ著「永井隆 原爆の荒野から世界に『平和を』」にその人物像が描かれている。

博士には、自らの死後に孤児になるであろう子供たちへの遺言ともいえる「鳩と狼」と題した文章がある。内容が、現代社会をあたかも予言したかのような思いが綴られており、紹介したい。

博士は、33年に満州事変

論壇

石川 清司

永井隆博士の語る「鳩と狼」

「鋭い牙」は抑止力か

に、37年には中国に従軍し九死に一生を得た。復員後に、残虐な原爆投下の結末を目の当たりにした。「人々はむごたらしい戦場の跡を眺め、口をそろえて、戦争はもうこりごりだ。これっきり戦争を永久にやめることにしよう」と叫ぶ。そう叫んでおきながら、「何年かたつうちに、いつしか心が変わり、なんとなくもやもやと戦争がしたくなってくるのである」と嘆く。

戦後71年。戦争を知らない世代が大半を占める。博士は語る。「理屈はなんとでもつき、世論はどちらへでもなびくものである。日本をめぐる国際情勢次第では、日本人の中から憲法を改めて、戦争放棄の条項を削れと叫ぶ声が出ないとも限らない。そしてその叫びがいかにも、もっともらしい理屈をつけて、世論を日本再武装に引きつけるかもしれない」と。

国会の論戦のようにも思える文章である。強力な抑止力の信奉者は、「敵が攻め寄せたとき、武器がなかったら、みすみす皆殺しにされてしまうではないか?」と主張する。

博士も問い掛ける。「武器を持っている方が果たして生き残るであろうか?、武器を持たぬ無抵抗の方が生き残るであろうか?」と。

かつて、無抵抗の住民は、生き延びる権利を有していたが、自国を強いたのは敵国ではなく、自国の軍隊であった悲惨な歴史もあった。

博士は語る。「狼は鋭い牙を持っている。それだから人間に滅ぼされてしまった。ところがハトは、何一つ武器を持っていない。そして今に至るまで人間に愛されて、たくさん残って空を飛んでいる」と。

いにしえの琉球の歴史もそのことを物語っている。「敵がなければ戦争は起こらない」

投下された原爆の意味を、今一度考えてみたい。抑止力とは? 「牙」は、果たして県民のために、国民のために、人類のために存在するのであろうか。

永井博士は、今日の日本の社会に問い掛けている。

(名護市、介護老人保健施設「あけみおの里」施設長、67歳)